

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	LI Yu
学位	博士(文学)
学位記番号	新大院博(文)第63号
学位授与の日付	令和3年9月21日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	井上靖の研究—日本人僧侶像をめぐって—

論文審査委員	主査教授 堀 竜一
	副査 准教授 角谷 聰
	副査 准教授 土屋 太祐

## 博士論文の要旨

本論文は、井上靖の仏教文学（仏教・僧侶を題材とする文学）のうち四篇の作品（短篇「澄賢房覚書」、短篇「僧行賀の涙」、長篇『天平の甍』、短篇「補陀落渡海記」）を取り上げ、日本人僧侶像について考察を行うことを目的とする。そのために、それぞれの作品の典拠を明らかにし、典拠と作品を対比・比較する手法を採用し、それに基づき、作品で造形化された僧侶像を読み解き、作者の創作意図・作品の主題を探究している。

本論文は、以下のとおり構成されている。

序章で、本論文の研究対象と背景、研究の目的を端的に述べ、論文の構成を予告し、第一章では、日本近代の仏教文学における井上靖の仏教文学の位置づけを明らかにしている。さらに、井上靖の仏教文学成立の背景として、井上靖が記者時代（昭和11年～26年）に蓄えた仏教知識および、仏教に関わる専門家の影響を検討している。

第二章では、井上靖の仏教文学における初の小説「澄賢房覚書」を取り上げ、まず、創作背景、典拠を検討し、井上吉次郎の『文観上人』で言及される立川流が、井上靖が高野山に注目するようになった原点であると指摘している。作品に登場する高僧宏栄については、水原堯栄をモデルとして、彼の師水原弘栄の名の読み方「こうえい」を借りて設定されたと推測している。また、常に「袈裟」を身にまとい「烈しい」人生を送る姿に澄賢像の特色を見出し、高僧宏栄の「冷たい」目に突き放され、三人の女性との「情痴」により世間から「破戒僧」の悪名を着せられながらも、最終的に煩惱から解放された澄賢の生涯を、作品は暖かく「回向」し

ていると論じている。さらに、「澄賢房覚書」と同時期に創作された「ある偽作家の生涯」を取り上げ、「澄賢房覚書」との共通点について考察し、澄賢の凍死と原芳泉の急死の場面が極めて類似していること、主人公の「冷たい」生涯が共通することを明らかにしている。

第三章では、遣唐使とともに中国に渡った留学僧の物語である「僧行賀の涙」を取り上げ、行賀の僧侶像の変容を中心に考察を行っている。長い中国滞在から日本に帰国し、宗論で一言も発することができなかった行賀が、「滂沱の涙」を流した心情の背後に、「いろいろの批判」に対する「抗議」を読み取っている。さらに、「僧行賀の涙」と『天平の薨』における、行賀、普照、業行三人の僧侶像を比較し、写経に没頭する僧侶像として三人が共通すること、「僧行賀の涙」の行賀が、後の『天平の薨』で、普照と業行の二人に発展することを明らかにしている。そして、写経に没頭する僧侶像のモデルの一つに、法隆寺金堂壁画の模写に没頭した荒井寛方画伯を想定している。また、行賀とともに中国に渡りながら、帰国せず大陸を旅して回る仙雲の「狂人のような」僧侶像を、行賀の僧侶像と対比して明らかにしている。

第四章では、やはり遣唐使とともに中国に渡った留学僧の物語である『天平の薨』を取り上げ、創作背景と留学僧の像について考察を行っている。まず、本小説の典拠が通説の『唐大和上東征伝』だけでなく、安藤更生『鑒真大和上傳之研究』草稿及び中村詳一の訳本も重要な典拠であることを明らかにし、そのうえで、普照、栄叡、業行、玄朗、戒融の五人の僧侶像を整理したうえで、栄叡と普照の対照的な僧侶像、鑒真と出会う前後の普照の変容、主人公としての普照像、経典・経巻に執着する業行の理解者としての普照像等を明らかにしている。さらに、業行が仏教用語「業」と関連づけられ、業行が写経した経典・経巻そのものが形として、最終的に日本に伝えられることはなかったものの、写経に没頭する行為という形で業行の「業」が積み重ねられたと指摘している。作品末尾で描かれる、唐招提寺に伝えられ、屋根に飾られた薨は、天平時代の文化交流事業に命を捧げた無数の無名留学僧たちの業績の具現化であり、留学僧たちの生涯の縮図そのものであると結論づけている。

第五章では、補陀落信仰に基づく渡海を題材とする「補陀落渡海記」を取り上げている。井上靖が参照した歴史資料として、神奈川近代文学館に所蔵されている平八州史の手書き資料と二河良英の資料を特定し、その二種類の資料から小説創作の背景を明らかにしている。そして、金光坊に先行する七人の渡海僧の様子・渡海の動機を、金光坊の視点から捉え直すとともに、補陀落渡海・補陀落信仰に対する金光坊の考え方・態度を整理している。そのうえで、死に直面した際の金光坊の内面を、金光坊が最後に書き残した二行の詞から解釈し、金光坊が最終的に、「求補陀者」は、実際の渡海より、「心」の修行の方が重要だという「心境」に至ったとして、「烈しい怒りと抗議」を表現していると結論づけている。

以上の考察に基づき、終章において、LI Yu は、各章で明らかにしてきた内容をまとめ、井上靖文学の体系的な研究における仏教文学の位置づけを明確にし、今後の研究課題として、西域小説を始めとする、井上靖の他作品との関連づけの必要性を提示している。

### 審査結果の要旨

本論文は、井上靖の仏教・僧侶を題材とする四篇の小説「澄賢房覚書」、「僧行賀の涙」、『天平の薨』、「補陀落渡海記」を考察対象とし、日本人僧侶像の特色を明らかにすることによって、井上靖の仏教文学の意義を究明しようとしたものである。本論文の独自性として、特に注目される点は、以下の諸点である。

1. 井上靖の創作活動は詩・小説・評論等、非常に多岐に渡り、かつ歴大である。小説にしても、現代小説、歴史小説、自伝的小説等のジャンルを構成し、歴史小説のジャンルも、日本歴史を題材・舞台とする歴史小説、中国歴史を題材・舞台とする歴史小説、中央アジア（西域・シルクロード）やロシアの歴史を題材・舞台とする歴史小説に大別される。本論文は歴史小説の中でも、仏教・日本人僧侶に焦点を当て、仏教伝来や仏教信仰といった、従来捉えられて来なかった井上靖の歴史小説の問題性を浮き彫りにしている。

2. 日本人留学僧の中国での仏教の勉強・修業を描く「僧行賀の涙」、『天平の薨』の考察では、中国仏教と日本仏教の差異、日本への仏教移入の意義を考察し、日本人のアイデンティティー、多数の無名な留学僧たちの犠牲の上に成立する日本仏教・日本文化の問題の形象化に作品の意義を見出している。江戸末期から明治にかけての高野山を舞台とする「澄賢房覚書」、室町期の補陀落信仰に基づく「補陀落渡海記」の考察では、日本化した仏教信仰において、真の信仰の内実とは何かを作品が問題提起している点に意義を見出している。この点は、仏教・日本人僧侶の観点により、初めて浮き彫りにできた点である。

3. 高野山関係資料、神奈川近代文学館所蔵の井上靖のメモ類、鑿真（鑑真）関係資料等を非常に丹念に調査し、作品成立の背景を実証的に深く探った努力は、非常に高く評価できる。

一方で、日本近代文学における「仏教文学」の定義が明確でなく、井上靖の仏教文学の文学史的位置づけがあまり展望されていない。同様に、終章のまとめにおいても、四作品それぞれの考察を通して、結局、井上靖が造形した僧侶像の共通点・全体像が何か十分に示されているとは言い難い。また、論の構成や個々の作品解釈に関しても、多々不十分な点が見られる。しかしながら、これらの点は本論文の学術的価値を損なうものではなく、むしろ本論文の今後の発展性を期待させるものである。

なお、本論文は井上靖の仏教文学・僧侶文学を論じたものであり、日本近代文学固有の分野に関する内容である。そのことから、本論文は、博士（文学）の学位を授与することが適切であると判断した。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。